

ミゲル・マルケス・カジェ神父（O.C.D.）および
デシデリオ・ガルシア・マルティネス神父（O.Carm）
両総長様からの手紙
ホノリウス3世の『*Ut vivendi normam*』発布
800周年（1226-2026）にあたって

I. 思い起こそう

記念すべき年

1. 親愛なる兄弟姉妹の皆様、1226年1月30日、教皇ホノリウス3世がカルメルの隠修士たちに、「*Ut vivendi normam*」という言葉で始まる書簡を送ってから、800年が経過しました。この書簡により、聖座は初めて、その隠遁者共同体の存在を公に認めました。ですから私たちは、この記念すべき年を祝い、皆様と共にその意義について思いを巡らせたいと願っています。
2. 少なくとも4世紀以降、カルメル山の斜面には隠者たちの集団や修道院が存在していましたが、1191年にリチャード獅子心王がキリスト教徒のためにアクレの街を奪還した後、12世紀末にかけてラテン系の隠者たちがそこに定着したことが分かっています。アクレは、エルサレム・ラテン王国の軍事的、政治的、そして宗教的な中心地となりました。ある時点で、カルメルの隠者たちは総大司教に「生活様式」(*formula vitae*)を要請しました。これは厳密な意味での「会則」——すなわち、聖アウグスティヌス、聖バシレイオス、あるいは聖ベネディクトのそのような、完全に組織化された修道会の生活を規律することを目的としたテキスト——ではなく、主に信徒からなる隠者たちの集団に適した、より簡素なテキストでした。彼らは極めて質素な生活を送り、祈りと巡礼者への奉仕に専心し、カトリック教会内での法的承認を求めています。より正確に言えば、彼らは「ティピコン」に類似したものを授かりました。ティピコンとは、特定の場所に集まって祈りと悔い改めを行う信者たちの生活を組織することを目的とした、東方教会における規則の呼称です。1206年から1214年の間に、聖アルベルトはカルメルの隠者たちに、手紙の形式で、霊的生活に関する簡潔な論考を授けました。その中で彼は、彼らが従おうとしていた理想と、それを実現するために必要な手段をまとめ上げました¹。このようにして、彼らは教会によって公認された修道団体となり、当時それが意味するあらゆる事項——修道服の着用義務、修道院長への従順の誓い、読み書きのできる者は詩篇を、できない者はその他の祈りを唱えること、特定の税金の免除、施しを集める権利、独自の礼拝堂や墓地を開設する権利、そして居住地の不可侵性——が認められました。
3. この「生活様式」は、カルメルの隠者たちの「プロポジトゥム」を体現しています。この用語は「目的」あるいは「中心的な意向」と訳すことができ、「イエス・キリストに心から従って生き、清い心と正しい良心をもって忠実に彼に仕える」（第2項）という彼らの決意を表しています。聖アルベルトは、これがカルメルの生活だけでなく、すべての奉献生活者の生活、ひいてはすべてのキリスト教徒の生活の根本的な動機であるべきであることを明らかにしています。イエス・キリストへの明示的な言及は極めて

¹ この情報は、シベルト・ディ・ベカ著『カルメル会規則に関する考察』（『カルメル会兄弟団の鏡、新刊』（以下、*Spec. Carm.* 1507）所収）、ヨハネス・バプティスタ・デ・カタネイス編、ヴェネチア 1507年、f. 31；『*Speculum Carmelitanum*』（以下、『*Spec. Carm.* 1680』）ダニエル・ア・ヴィルジネ・マリア編、第I巻第1部、アントワープ 1680年、83頁 注39に記載されている。

重要です。隠者たちは「清い心と正しい良心をもって」主に仕えるために、主の地へと身を引きました。彼らは主の神秘を黙想し、その足跡をより親密にたどるために、その現存によって聖化された場所の近くに住むことを望んだのです。「会則」に関するいくつかの注解によれば、第10項（第8項？）は、この生活の枠組み全体の基礎的な要素の一つを構成しています。「各自は昼も夜も、主の掟を黙想し、かつ、祈りのうちに目覚めて、ほかにしなければならないことがないかぎり、自分の修室の中か、あるいはその近くに独りでいなければならない。」私たちの生活に方向性を与えるものが、規律上の掟でも、禁欲的な実践でもなく、祈りの中で神のみことばに絶えず聴き入ることであるのは、決して偶然ではありません。他のすべてのことは、主とのこの生きた関係を可能にするために秩序づけられています。預言者エリヤや聖母マリアの模範に倣い、男女を問わず、私たちカルメル会修道者は、常に神のみ前に生きるよう努め、神に私たちの心と精神を満たしていただき、祈りを通して神との愛の関係の中で生き、神のみことばに導かれ、教えを受けるよう召されています。

教皇ホノリウス3世の書簡

4. 1215年にローマで開催された第4ラテラン公会議は、新たな修道会の設立を禁止し、既存の団体に対して教会が承認した会則のいずれかを採用するよう求めました。例えば、ドミニコ会やメルセデス会などは、聖アウグスティヌスの会則を採用しました。一部の司教たちは、カルメル会に対しても同様の措置をとるよう圧力をかけました。しかし、カルメル会はすでに、公会議以前に作成された聖アルベルトの「生活様式」という、会則の役割を果たす文書を所有していました。カルメル会は聖アルベルトの後継者に支援を求めましたが、彼はどう対応すべきか分からず、聖座に直接訴えるよう助言しました。ホノリウス3世の書簡は、こうした文脈に位置づけられるべきです。それは単なる「コマンド（*mandatum*）」であり、広い意味では「執行令状」とも形容できます。したがって、それは紫と金の絹の紐で吊り下げられた封印付きの勅書のような厳粛な文書ではありませんでしたが、その簡潔さの中に、会が求めていた最初の承認を彼らに与えた文書でした。その書簡の内容は以下の通りです。

「愛する息子たち、カルメル山の修道院長および隠遁修道士たちへ、平安と使徒的祝福を送る。良き記憶に残るエルサレム総大司教によって公布された規則的な生活様式を、あなたがたは公会議の前に謙虚に受け入れたと述べているが、今後、あなたがたとあなたがたの後継者たちは、罪の赦しを得られるよう、神の助けを借りて可能な限りこれを遵守するよう我々は命じる。教皇在位第10年、2月のカレンズ（ついたち）の2日前（1226年1月30日）リエティにて発布。」²

今日、私たちは原本を所有しておらず、ホノリウス3世の『書簡記録簿』にも見当たりません。この教皇勅書が初めて印刷されたのは、1507年にヴェネツィアで刊行された『*Speculum Carmelitanum*』であり³『*Bullarium Carmelitanum*』の編集者は、おそらくそこからこれを転写したものと見られます。他の証拠によれば、トゥールーズ⁴およびロンドン⁵にも写本が存在していたはずですが、そして、この承認の存在は絶えず裏付けられ

² 『*Bullarium Carmelitanum*』（以下、*Bull. Carm.*）、エリセウス・モンシニャーノ編、第I巻、ローマ1715年、1頁。

³ *Spec. Carm.* 1507, ff. 29v-30r.

⁴ *Spec. Carm.* 1507, 29v参照。

⁵ ジョン・ベーコンソープ『*Compendium historiarii et iurium*』Adrianus Staring編『*Medieval Carmelite Heritage*』（以下、MCH）ローマ、1989年、206頁参照。

ています。現存する最古の会憲である1281年の「ロンドン会憲」⁶においてさえ、ホノリウス3世教皇の介入が言及されており、前述の通り、ベカのシベルトとジョン・ベーコンソープはそれぞれの論考において、これについて論じています。

書簡の内容

5. しかし、この文書は私たちに何を伝えているのでしょうか？ 時折主張されてきたように、これは「会則」の承認だったのでしょうか？ 他の義務は課されているのでしょうか？ 冷静に検討してみましょう。現存するこの書簡には、いわゆる「アレnga (arenga)」すなわち教皇に対する請願の概要と、その要請の理由および目的が欠けています。したがって、請願者が誰であり、何を求めていたのかを正確に知ることはできません。本文から、教皇がアルベルトの「生活様式」を承認し、罪の赦しを得るために修道士たちにそれを忠実に遵守するよう義務付けていることが確認できます。言い換えれば、「生活様式」の厳格な遵守は、罪に対する一種の悔悛または償いを構成しており、教皇はそのような遵守を命じているのです。ここには、この義務と特権を兼ねた規定と、最初の巡礼者・隠者たちの元々の「プロポジトゥム（目的）」——罪の償いとして隠遁生活を送ること——との間に、一貫性が見て取れます。
6. ホノリウス3世が用いた2つの表現は、特に興味深いものです。1つ目は「*regulariter*（規則的に）」という用語であり、これは規範に従った生活の規則性を指します。ある意味で、この用語は、「生活様式」の遵守が「会則」によって確立された修道生活、まさしく「規則正しい」生活へと道を開くという考えを先取りしています。これは、カルメル山から移住してきた隠者たちの生活をヨーロッパの文脈に適応させるために、インノセント4世によって修正されたテキストが、1247年に承認されたことで実現することになります⁷。もう一つの興味深い表現は、「生活様式」の本文そのものに関するもので、それは「あなたがたが言うように、公会議の前に謙虚に受け取ったもの」とであるとされています。この記述には二つの側面が含まれています。第一は、修道士たちがアルベルトから「生活様式」を受け取ったという証言に関するものであり、一方、聖座にはそれに関する他の情報は一つなかったということです。第二に、アルベルトが修道士たちに書簡を送った時期に関する点で、すなわち1215年に開催された第4ラテラン公会議以前であるという点です。これは間違いなく事実です。なぜなら、この聖なる総大司教は、ローマへ出発して公会議に参加する前に、1214年9月14日に刺殺されていたからです。さらに、公会議が開催される前にアルベルトの文書を受け取っていたという事実により、カルメル会修道士たちは、第4ラテラン公会議のカノン第13条によって定められた、新規修道院の創立禁止に基づく異議から免れることができました。公会議のカノンが要求していたように、ホノリウス3世でさえ、隠者たちに「承認された会則の一つ（*una ex regulis approbatis*）」を採用するよう義務づけることはなかったのです。

教皇は何を認めたのか？

7. したがって、教皇はカルメルの隠修士たちの共同体を承認し、「生活様式」を権威あるものと見なし、彼らにそれを返還するとともに、罪の赦しを受けることができるよう、それを遵守するよう「命じ（*iniungimus*）」ました。この最後の点は重要です。なぜな

⁶ 『ルブリカ・プリマ』(1281年)、『MCH』所収、41頁参照。

⁷ インノセント4世、『*Quae honorem Conditoris*』(1247年10月1日)、『バチカン使徒公文書館』、Registrum Vaticanum 21, ff. 465v-466r。

ら、この共同体の悔悛的な起源を想起させるだけでなく、過去数十年にわたり繁栄していた多くの悔悛的隠者共同体の一つとして、これを認めているからです。これは、時折性急に主張されるような「会則の承認」ではなく、共同体とその生活様式に対する最初の承認でした。

8. 実際、『教皇勅書集 (*Bullarium*) 』は、「生活様式」の本文をホノリウス教皇の勅書の直後に配置しており、これは1380年頃にフェリプ・リボットが編纂した『最初の修道士たちの設立に関する十巻書』の第8巻にも同様に記載されています⁸。明らかに、往古のアルベルトの「生活様式」は、インノセント4世が「会則」を承認し、それに「*Regula bullata* (教皇勅印付き会則)」の地位を与えた際に、その写本を破棄するよう命じたにもかかわらず、現存していました。それにもかかわらず、『教皇勅書集』に掲載されたテキストが、アルベルトによって授与された正確な時期(1206年から1214年の間)ではなく、1171年という日付を示しているのは興味深いことです。これは、修道会の創立をめぐる伝説——その起源をより遠い過去に遡らせようとする傾向があった——の名残である可能性があります。歴史的に見て、ハッティンの戦い(1187年)以前、すなわちアクレと狭い海岸地帯の奪還を経て、聖地の情勢が安定した1192年または1193年以前に、それらが起こったと想定することは困難です。
9. 年代の問題や創立伝承の伝統は、「原始会則」という表現が時折用いられ、事実上、インノセントのテキストとアルベルトのテキストが混同されてきた理由を説明する一助となるかもしれません。公式的に言えば、1247年にインノセント4世によって承認・公布されたテキストのみが「会則」です。この会則は、カルメル会修道士たちが、人口密集地から遠く離れた人里離れた場所だけでなく、提供された場所ならどこにでも修道院を設立できる可能性を導入しました。また、当時すでに、すべての修道者に義務付けられていた三つの誓願の宣立を定めました。以前は、各個人が自分の修室で詩篇やその他の祈りを唱えていたのに対し、共同で聖務日課を唱えるよう命じ、また、以前は特別な機会にのみ行われていた共同の食事を義務付けました。現存する最古の「会則」の写本は、この教皇勅書とともにバチカン公文書館に保存されています。このため、それ以前のテキスト(聖アルベルトの「生活様式」)に関するあらゆる復元は、必然的に仮説的なものとなります。福者ヨハネ・ソレトやイエスの聖テレサが「原始会則」について言及する際、彼らが指しているのは1247年のテキストです。実際には、これは聖アルベルトの文書を改編したものであり、その後改訂されることはなかったのです。後の「緩和措置」は、根本的な骨格を変えずに修正条項が加えられる方法で、本文自体を変更することなく、注記や特例として付加されたのです。

長い旅の第一歩

10. また、ホノリウス3世によるこの最初の介入は、13世紀を通じて、さらには14世紀の最初の数十年にかけて続いた、一連の教皇による介入というモザイク画の、単なる最初の1枚に過ぎなかったことも指摘しておくべきです。インノセント4世による根本的な承認に加え、1326年11月21日——今から700年前——に発布されたヨハネス22世の別の教皇勅書についても想起しておく価値があります。この勅書において、教皇はカルメル会に、ドミニコ会やフランシスコ会がすでに享受していたすべての特権を認めました⁹。この文

⁸ フェリプ・リボット『最初の修道士たちの設立に関する十巻書』第8巻「キリルへの書簡」、パリ、アルセナル図書館所蔵、Ms.778、ff. 57v-59r参照。

⁹ ヨハネス22世、『*Inter coeteros*』(1326年11月21日)、『*Bull. Carm.*』第1巻66-67頁。これにより、教皇はドミニコ会およびフランシスコ会に与えられた「*Super cathedram*」の特権をカルメル会にも拡大した。

書は、同会が托鉢修道会の一員として完全かつ決定的に組み入れられたことを示すものでした。しかし、その前に、第2リヨン公会議（1274年）後の重大な局面を乗り越えなければなりません。同公会議では、第4ラテラン公会議以降に創立されたすべての「新規修道会」（当時すでに教会に対する「有益性（*utilitas*）」が確立していたドミニコ会とフランシスコ会を除く）を廃止することが決定されたのです。アウグスティヌス隠修会とカルメル会は、聖座が決定を下すまで、どっちつかずの状態に置かれました。この公会議の決定を受け、これらの修道会は、自らの「有益性」が認められることを目指して、刷新と成長のプロセスを進めることになります。使徒職に関しては、大学への関与を強化し、学位を取得して教鞭を執ったり、説教を行ったり、告解を聞いたりできるようになること、また一部の教区の責任を引き受けることなど、様々な措置が講じられました。カルメル会にとっては、マントの色を縞模様から白に変更するという問題もあり、これは1287年のモンペリエ総会において、教皇ホノリウス4世によって認可されました。これは、教区、大学、都市における彼らの受け入れを円滑にするための手段でした。

Ⅱ 現在について考えてみよう なぜこの書簡を記念するのか？

11. ここで私たちは自問するかもしれません。今日、この文書を記念することにはどのような意味があるのでしょうか。21世紀を生きる私たちにとって、ホノリウス3世の介入が伝えるメッセージとは何でしょうか。それは、広範かつ多面的なカルメル家族のメンバーにどのような影響を与えるのでしょうか。確かに、これは考古学の問題でも、純粋に歴史主義的なお祝いでもありません。800年の歴史と、その間に起きたあらゆる出来事を経たホノリウス3世の書簡は、それ自体、私たちにとってあまり興味深いものには見えないかもしれません。しかし、よくよく考察してみると、そこには現代に関連するいくつかの洞察が示されています。それらについて共に考察してみましょう。「レクチオ・ディヴィナ（聖書黙想）」を行うかのように。書簡の本文をゆっくりと読み返してみましょう。
12. 「われらは、あなたとあなたの後継者たちに命じる。神の助けを借りて可能な限り……」。まず第一に、私たちに個人的に関わっていることに留意すべきです。ホノリウス3世は「あなたの後継者たち」と述べていますが、それはまさに私たちのことなのです。したがって、続く内容は私たちに直接関係するものです。私たちは、アルベルト総大司教が私たちに書き送った「生活様式」——今や私たちの会則となっているもの——を「規則正しく」遵守するよう招かれています。これは、たまたまその気になった時にだけ行うような一時的な誓約ではなく、まさにその規則に従って、継続的かつ規則正しく、秩序ある実践を行うことなのです。私たちはこれを「神の助けを借りて可能な限り」行わなければなりません。この表現には、修道誓願やカルメル会第三会（TOC）——跣足カルメル会在世会（OCDS）——における誓願によって私たちが負う、個人的な奉獻のすべてが込められています。確かに、常に「神の助けを借りて」です。「わたしから離れては、あなたがたは何もできない」（ヨハネ15:5）と、イエスは私たちに警告しておられます。カルメル会の生活を具体的に生きるためには、この柔軟性が必要です。すなわち、修道会の会員は、本質的なものに忠実でありつつ、共に歩み、働く姉妹や兄弟たちの文化、考え方、習慣と絶えず対話しながら、周囲の現実と向き合うよう求められています。霊的な成熟度は、適応する能力にも表れます。
13. 「……あなたがたの罪の赦しのために、規則正しい生活様式を守りなさい……」教皇は、

当時の文書によく見られる定型句を用いて、そのような遵守は「罪の赦しのため」、すなわち、聖性への献身であり、いのちの満ち溢れ、神との完全な交わりの達成に向けた取り組みであると述べています。要するに、これには、その後の8世紀にわたり、世界各地のカルメル会修道者たち——男女を問わず——が、霊的生活に関して、そして浄化と、神との神秘的な一致への旅路に関して経験し、教えてきたすべてのことが含まれているのです。カルメル会のカリスマは、ある意味で、ホノリウス3世によって、萌芽的な形であったにせよ、すでに認められていたのです。この意味で、「生活様式」——今日の私たちにとっては「会則」——に従えという命令は、聖地、すなわち天のエルサレムへと向かう聖なる巡礼を続けるよう、明確に招いているのです。私たちは、修道会のカリスマを軸とした、内的な変容の道を歩むよう招かれています。その根本的な観想的次元は、祈りと共同体における奉仕によって養われ、私たちが聖霊の賜物を受け取り、共に清められ、照らされることを可能にします。それによって私たちは「神を見る」ことができ、聖霊によって神と結ばれて、私たち自身の中、兄弟姉妹の中、自然の中、そして歴史の中に神の現存を認めることができるのです。

私たちは教会の一員であり、歴史の中に生きている

14. 「... 故エルサレム総大司教によって書かれたものであり、あなたがたが言うように、公会議の前に謙虚に受け取ったものである。」教皇のこの短い言葉からは、さらに別の点を読み取れます。それは、少なくとも三つの点において現れている教會的な次元です。第一に、まさにこれが教皇の文書であるという事実そのものです。すなわち、教会の最高権威が、カルメル会としての私たちの存在を認める、権威ある文書を私たちに与えてくれているという点です。教皇ホノリウス3世のこの行為は、独自のカリスマを育む運命にあった、一つの経験の善性と真実性を認めた、識別の行為でした。第二に、「生活様式」の著者であるアルベルト総大司教と、新しい修道共同体の創立に向けた明確な指針を定めた総会議（1215年の第4ラテラン公会議）の両方が言及されている点です。これらの要素が重要なのは、それらが私たちを、当然のことながら、教会の体の中に位置づけるものであり、これが第三の考察点へと導くからです。すなわち、私たちは主イエスを信じる信徒の共同体の一員であり、神殿を築くための生きた石なのです（1ペトロ2:5参照）。悔い改めと祈りに満ちた生活、使徒的・宣教的な献身、そして兄弟愛に満ちた交わりを通じて、私たちは「神に喜ばれる、聖なる、生きた供え物」（ローマ12:1）を捧げることに貢献できるのです。私たちは、教会と共に、教会の中に、そして教会のためにあるカルメル会修道者です。自分たちの中に閉じこもったり、内向きになったりすることはできず、神の民への謙虚で単純な奉仕に自らを開かなければなりません。この旅路において、私たちはキリスト教共同体のあらゆる構成員との関係性の中で、彼らから学び、彼らと対話を交わし、経験を分かち合います。
15. 「教皇在位10年目、2月のカレンダス（ついたち）の2日前（1226年1月30日）、リエティにて発布。」この日付から、もう一つ重要な考察が導き出されます。カルメル会の隠修士たちがこの書簡を受け取った時期は、重要な出来事が相次いだ時期でした。その同年の10月3日、アッシジの聖フランシスコが死去し、教皇ホノリウスは彼よりわずか1年余り長く生き延びた後、1227年3月18日に死去しました。「世界の驚異（*stupor mundi*）であり、驚くべき変革者（*immutator mirabilium*）」として知られたフリードリヒ2世が皇帝の座に就いていましたが、彼はまもなく、セニ伯ウゴリーノ——後の教皇グレゴリウス9世（1227-1241）——と対立することになります。後者はカルメル会に対して、貧しさを要求しつつも、運搬用の家畜や家禽の飼育を認めるものなど、重要な書簡を発

行しました。この規定は、後に会則の条文に組み込まれました。この時代は決して平穏なものではなく、教皇と皇帝の間、都市と封建領主の間、異端運動と教会の間、そして聖地におけるイスラム教徒とキリスト教徒の間で、広範かつ絶え間ない対立が続いていました。それは他の多くの時代と何ら変わりなく、現代と比べても決して良い時代ではありませんでした。私たちの先人たちは、聖なる悔い改めの生活を送るために、カルメルの荒野へと退き、当時の社会に対して預言者的な姿勢をとり、本質的で、単純で、平和的で、兄弟愛に満ちた生き方を提示しました——それは福音的であるゆえに、真に人間的な生き方でした。

福音的預言への召命

16. 数え切れないほどの問題に悩まされるこの激動の時代において、会則への従順は、キリストとその福音への完全な忠実を示す、謙虚でありながら力強い証しとなり得ます。両修道会、そしてカルメルの様々な形態における兄弟姉妹たち、私たちは皆、みことばへの静かな傾聴、世とその考え方からの離脱、個人的および共同体の祈り、私たちの生計と神の民の益のための静かな労働、受け入れと奉仕に満ちた兄弟愛、霊的闘い、そして共同体的な識別へと召されています。これらすべては、会則とそこから生まれた伝統によって私たちに教えられています。教皇ホノリウス3世が「罪の赦しのために……規則正しく (*regulariter ... in remissionem peccatorum*)」生きるよう招いた言葉は、今も私たちにとって有効であり、マリアとエリヤの模範に従いつつ、私たちが召されている内的な変容の道へと私たちを導いてくれます。
17. 私たちは、広範かつ恒常的な紛争が蔓延する状況（教皇フランシスコが「断片的に繰り上げられる世界大戦」と呼んだもの¹⁰）に生きており、さらに、劇的な気候変動や、平和や人々の幸福には無関心で、自らの富の蓄積能力——それは無限だと想像している——にのみ深く関心を寄せる、多国籍企業や政治権力による虐待にさらされている人々が被る、さまざまな形態の貧困や搾取という課題にも直面しています。こうした状況に直面して、私たちは、福音に根ざした、単純な生き方という選択肢を掲げることができます。それは、従順、貧しさ、尊重、兄弟愛、そして奉仕における寛大さです。これらすべてによって、困難な紛争状況に対する一つの答えとして、対話と和解を差し出すことが可能となります。同様に、人工知能の誘惑に直面しても、私たちは常に、自由と責任を全うしうる「人間の偉大さ (*magnifica humanitas*)」への評価を生き生きと保つことができます¹¹。絶え間ない祈りと神との交わりによってのみ、私たちは、神の絶対性を認識しつつ、自らの尊厳と他のあらゆる被造物の相対性をも認識しうる人間として、このように生きることができるのです。

共に、未来への旅路を歩む

18. 今日もなお、多くの人々がカルメル会の会則に従って生きるよう召されています。彼らすべてにとって、カルメルの古来の伝統を知り、評価し、再解釈するという責務があります。年長世代には、受け継いだものを証しし、語り継ぐという任務があります。そうすることで、遠くから、また最近になって召された人々が、修道会の起源と真に触れ合

¹⁰ 教皇フランシスコは、2014年8月18日、韓国・ソウルへの使徒的訪問からの帰路の飛行機内で記者団との会話の中で、この表現を初めて用いた。この表現は、彼の在位期間中、何度か繰り返された。

¹¹ レオ14世、人工知能の時代における人間の尊厳の保護に関する回勅『*Magnifica humanitas*』（2026年5月15日）、バチカン市国 2026年 参照。

い、それと恋に落ちることができるのです。イエスは今もなお呼びかけておられます。私たちがその声を伝える拡声器となりましょう。

19. 空の墓の体験と、十字架にかけられ復活された方との出会いに根ざし、常にカルメル会の霊性を養ってきた「希望」は、歴史の成就へと向かう旅路において、私たちを支え、導いてくれます。私たちの母であり姉妹であるマリアは、私たちに寄り添い、ゴールに向かって私たちの先を行ってくださいます。神の母であり私たちの母であるマリアへの敬愛は、感傷的あるいは感情的な現実ではありません。むしろ、この旅路において私たちが独りではないこと、そして何よりも、被造物とすべての人が消滅へと定められているのではなく、いのちの満ち溢れへと向かっているという自覚から生まれるものです（ローマ8:18-25参照）。
20. 愛する姉妹兄弟の皆さん、この記念の年が、新たな活力と新鮮な推進力を得る機会となりますように。私たち一人ひとりがカルメル会の召命の美しさを再発見し、真の回心と、兄弟愛に満ちた生活とさまざまな形をとる奉仕への献身の精神をもって、旅を続けますように。何よりも、私たちの聖人たちが教えてくれるように、祈りに養われつつ、神との完全な一致へと導くその道を歩み続けますように。聖人たちの経験と教えに励まされ、私たちは世に属することなく世にあって（ヨハネ17:14-19参照）、カルメルの道に従い、キリスト教生活の無私の証しを、世に差し出していきましょう。
21. この考察を締めくくるにあたり、イエスの聖テレサの言葉を引用したいと思います。この言葉は、単に輝かしい過去の記憶にとどまるのではなく、未来を築くために、今日その記憶を生き生きと蘇らせるよう私たちを招いています。それは、私たちが検討してきたすべてに対するふさわしい結論となるでしょう。「昔の聖なる人たちは、修道会の礎であったから、自分たちよりももっと大きなお恵みを主からいただいたに違いないと言われるのを、時々耳にします。確かにそのとおりです。けれども、私たち自身、あとから来る人たちに対しては、礎であることを、いつでも考えるべきでしょう。もしも今生きている私たちが、先人のたどった完徳の道を歩み続けるなら、そしてあとに来る人たちも同じようにするなら、建物もしっかり立ち続けましょう。もしも自分の不徳と悪い模範によって建物を台無しにしてしまうなら、たとえ先人たちがどんなに完全であったとしても、それが何の役に立ちましょう？ 新しく入ってくる人たちが、とっくの昔に死んでしまった修道者の模範よりも、今現に目の前に見ている人たちの模範にいつそう心を動かされるのは至極当然です。」（創立史 4.6）。
22. カルメルの母であり光栄であるマリアが、生き方の指針としてカルメル会の会則を守る私たち一人ひとりへと、その眼差しを向けてくださいますように。私たちは、カルメル会家族全体を彼女に委ねます。そうして、私たち皆が「イエス・キリストに心から従って生き、清い心と正しい良心をもって忠実に主に仕える」ことができますように。

2026年9月17日、ローマにて。

エルサレムの聖アルベルト、司教にして当修道会の会則制定者の祝日に。

ミゲル・マルケス・カジェ、O.C.D. 総長

デジデリオ・ガルシア・マルティネス、O.Carm. 総長